
科学学園都市住民が魔法学園都市の祭りへ行く

杉田玄白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学学園都市住民が魔法学園都市の祭りへ行く

【Zマーク】

Z4366P

【作者名】

杉田玄白

【あらすじ】

6月1~8日急に「打ち止め」がいなくなつた。東京にある科学学園都市内にはいる可能性が高い。新たにできた可能性として千葉にある癪帆良学園があげられる。一方上条家に父、刀夜から癪帆良学園で行われるまほら祭にこいという手紙が来る。「一方通行」や「幻想殺し」がいくのを知らない神楽坂明日菜や、ネギ・スプリングフィールドは、もくもくとまほら祭の準備を進めていく。

「あん野郎、アーニ行をやがった」 b y一方通行（前書き）

「とある魔術の禁書目録」と「ネギまー」との、原作が漫画と小説のクロスだから少し無理があるかと思いましたが、できるだけ頑張つていきます。

「あン野郎、ドコ行きやがった」　ｂｙ一方通行

「あン野郎、ドコ行きやがった」

一方通行は、第一四学区にいた。

実は、打ち止めがいなくなつて一田田になつていてる。一田田はまつといたら帰つてくるだろ?と思つてほつといていたわけだが、

「クソがあ」

全く帰つてこなくて、一方通行自身が探しに行つてているわけだ。御坂妹達もいないことに気が付き検索を行つてゐるのだが、

『こちら検体番号一八五三四号、現在第一学区から一一学区までを洗つたが打ち止め及び、一〇〇〇一号の居場所を特定できず。とミサカは息を切らしながら報告してみる』

『こちら検体番号一四三三一一号、現在第一一学区上空からヘリで搜索中。いまだ発見できません。とミサカは半ばあきれつネットワーク上に情報を流す』

『こちら検体番号一九〇〇三一号、色々な方法で一〇〇〇一号と連絡を取れないか試したが無理だった。とミサカは、あいつドコ行つたんだよ、という本心を隠しつつ他のミサカへ情報を送る』

という状態なのだ。

「チツ、一旦戻るか」

黄泉川のところへ戻つて情報を得たほうがいいと判断したのだろう。が、

「つつてもアテになんねんだらうけどな」

一方通行は横を通る車を軽くおいぬかしながら黄泉川のアパートへ向かう。

「学園外にいる可能性が高いとはどおりのことだ」

「そういうことじやんよ」

横泉川は、淡々と告げる。

「まあ、ちょっと警備隊の方で各学区の施設のＩＤログを調べたんじやんよ。するとどこにもその打ち止めのＩＤがなかつたんじやんよ」

「この学園都市内の住民には全員ナノデバイスを打ち込まれている。なかにはカードとして持ち歩いている人もいるが。各施設を使う際にはその人の履歴が残る、それがＩＤログだ。

「この一日間レストランはおろか駅やバスも使ってない、ていうことかア」

「そうこいつによじやん」

一方通行は一つ舌打ちをした。

「なんだこれ」

上条家に一通の手紙が来た。

「上条刀夜？」

「とうまとうま、とれなに？」

中身はどうも上条刀夜もとい当麻の父からの手紙だった。

「父さんからの手紙」

「なんてかいてあるの？」

「までまで、いま読むから」

適当にインデックスをあしらいながら当麻は手紙を読み始める。

「『やつほー、当麻はげんきかー?、こつちは毎日風邪ひきそなことやつてるぞー。実はな、明日からまほら祭つて言うのをやららしいんだよ。よかつたら行つて來い。チケットとかいろいろ入れてあるから。おれたちもいくぞー。じやなー』from上条刀夜』

「・・・・・・・・・・・・・・」

当麻とインデックスが二人揃つて黙り込む。さきに、口を動かしたのはインデックスだった。

「風邪ひきそなことつてどんなこと・・・・?」

「……海でも泳いでんのか、でもこま十円だし」

「…………行つてみよつかなあ～」 b y上条当麻（前書き）

そういうえば、この題名と全く同じ題名の小説が存在しますが、あれは私がミスで投稿してしまったものです。気にしないでください。というより誰か消し方を教えてください。

「…………行つてみようかなあ～」 b y上条当麻

「…………「つ〜ん」

現在当麻は、ライトがつき始めた車の横を歩いていた。あの刀夜からの手紙を見て行つてみようかなと思つていたのだ。もともと外の祭りは全然見たことがなかつたし、たとえ規模はしょぼくても、おみこしさえ見たことのない当麻だつたからそれを見れるだけで結構興奮しそうだつた。

「…………どうしようかなあ～」

当麻も「まほら祭」についていろいろ調べてみた。

分かつたこととしては、この学園都市内で行われる祭りではないということ、期間は6月20日から22日までということ、祭りの内容はおおざっぱに言うと文化祭に近いものということ、その割には規模が半端なく大きくて全国から人が集まつてくるということだった。

「…………行つてみようかなあ～」

当麻はオレンジ色に染まつた空を見上げながらつぶやいた。
(行くとしたら、誰を誘つかな～。土御門？ 美琴？ インデック

スはもちろんんだな)

「あんた、何さつさからぶつぶつ言つてんのよ」

「おわあ」

いつの間にか当麻のうしろには美琴が歩いていた。

「びつくりしたあああ」

「ちよつと何勝手にびつくりしてんのよー」

バチバチと美琴は髪の毛を鳴らしながら言つた。

「う〜ん、なあ 美琴」

「なによつ

「い、いやせ、次の20日空いてないか？」

「へ？」

「次の20日から22日までわちよひと外の祭りに行きたいんだだけ
じゃ、じゃむなら美琴も一緒にどうかな、つと黙つて

かわいい、やなぐま琴も一緒にいるかな」「心配で」

「え、え、私でいいの？私のお母さんの方がいいとかじゃなくて？」

和一いひの和のさせたノア万い。

「ん？ そうだな、美琴がむりつつうんならそつちに」

「一戻一戻一戻一戻」トトロトトロトトロ

「少爺，你怎麼了？」

れえ

「え、
うん」

当麻は、さすがに、美琴の顔を見た。

「うどんのかーーのか? そんなこ簡単こ決めても。外で行くんだぞ。」

て言ひがいのうそくなは簡直は済めてモ
外は行

「いいのい」

「？」

「んで、

「だからな、その祭りはこの学園都市内でするんじゃないんだよ」

「千葉で行われるんだよ、その祭りは二

「ちばあ！？」

「アーティストの個性」

גְּדוֹלָה מִזְמָרָה וְעַמְדָה

「分かつた、分かつたから首を絞めるなああああああああ」

「どうも、あこつは千葉に行つた可能性が高いじゃんよ」

「何でなんだよ」

「あこつは、ソリと同じような学園都市があるじゃんよ。ソリはソリほどでもないが科学力が半端ないんじゃないかな」

「ハツ、言ってくれるねH」

「というわけで行つて来いじゃんよ」

「ハア？」

「うちは警備隊アンチスキルの仕事で忙しいんじゃん。だから代わりに行つて来い」

「なんでおれがア、いかなくちやなンネHんだよオ」

「まあまあ、そこではちょうど祭りもあるみたいなんじゃんよ。ついでだから遊んで來い」

「チツ、めんどくせH」

黄泉川がため息交じりで続ける。

「まあ、敵と対峙する可能性もあるけど・・・・まあ問題ないじゃん」

「それより、チョーカーはビオすんだ?」

「それなら特別にあのカエルから予備バッテリーを貰つてきたんじやん」

黄泉川がつきだしたバッテリーを見て、一方通行は少し驚く。

「あれ作るの、そつとうめんどーなんじゃなかつたかア」

「それは使い捨てなんじやんよ、お前が今つけている充電可能なチヨーカーよつずつと仕組みが簡単じゃん。まあ、よほどの長期戦がない限りはつかうこともないじゃんが」

「おいしそ、つてミサカはミサカは喜んでみる」 ミサカ

「ほれ、これ食べてみい」
「わーい、いつただつきまーす、つてミサカは手を畠わせながらい
つてみる」

打ち止め（ラストオーダー）は鬪の長いこれまた「カイイヤリン
グのした年取つたジイさんからもりつたりん」餌にガジリ付く。
「おいしそ、つてミサカはミサカは喜んでみる」

「ふあふあふあ、じゃあこれも食べなさい」

「わーいわーい、つてミサカはミサカは喜びのあまりはしゃぎま
ぐる！」

「いいのぉ、子供は元氣で可愛くて」

「もつとちょうどい、つてミサカはミサカは上目遣いで頼んでみる
「じゃあ、これも食べなさい。大丈夫、たくさんあるから」

カン、カン、コン、カン。

夜、暗い教室の中で釘を打つ音が響く。

「（ちよつとまき絵さん、金槌の音が大きいですわよー！）」

「（わかつてるよーいんちょ。けどこれ以上小さくするの無理ー！）」

「（このかー、ちよつとそこ）のべんきどつてー」

「（はいなー）」

暗い教室の中、30人ほどの生徒が全員金づちやのこじもりといつ
た工具を持っていた。みんな、もうすぐ始まるまほら祭への準備を
しているのだつた。

「（くわ、まほら祭の準備での居残りは前田だけだつて言つのに）」
（元のひ）

「（いいじゃんいいじゃんそんなこと）」

「（うう、ぼく先生なんですけどー）」

「（ほんとに申し訳あありません、ネギ先生）」「

「（ありがとねー、ネギ君）」

ネギ君、ネギ先生と呼ばれているのは3・Aの担任である10歳の、いわゆる子供先生なのだ。みんなの手伝いに駆り出されたのが、まだ子供のせいなのか、禁止行為にもかかわらず生徒を止めるどころか一緒になつてやつているのである。

「（やばい、鬼の新田が来たよつ）」「

隣の組の3・Bの生徒が伝えに来る。

「（オーケ、みんな隠れて）」「

カン、カン、カン、と一つの足音が近づいてくる。

ん？ 新田じやない？ と、クラス全員が思つ。

「（ん？ だれなんだろ）」「

（つちよつとゆーな、見つかるで）」「

物陰に隠れているゆーなをアスナが止めにかかる。

「（わかつてる、だいじょーぶだよ）」「

ゆーなは、物陰からチヨコッと頭を出して教室の扉の方を見る。が、

だれもいない？

そこでアスナに背中側の襟をつかまれて引っ張られる。その瞬間、なにか静電気のようなものを扉の方から見えた。

そして、

「やつぱり、よるの学校つてこわいかも、つてミサカはミサカはぶるぶる震えてみる」

「わざわざ強がつて夜に来る」ともないいんじやないのかのあ

・・・・だれ？

「（チヨコッと頭出し過ぎ）」「

（いや、ちよつと）」「

カン、カン、カン、といつ一つの足音が遠ざかっていく。

みんな、ばれなくてよかつた、と安どのため息を漏らす。

「（ねえ、このか。今の誰かわかつた？）」「

「（たぶん、おじいちゃんと…・・ネギ君？）」

「（僕ならここにいますよ～）」

ネギの近くでなぜか怒っている様子で

「・・・・・そんな隠れてネギ先生にアピールするなんて、そこを

代わりなさいーのどかさんー！」

「（いいんぢょ、戻つるさーー）」

「おいしそ、つてミサカはサカは喜んでみる」 ピタカ（後書き）

なんか、大半が絵になつてしましましたが・・・
今回は麻帆良学園の方をおもに書いてみました。つと言つてもほとんどのようですが・・・。アクセラレータたちの会話を楽しみにしていらっしゃった方たちにはすみません。次回はまた、科学サードをメインに書きます。・・・たぶん。

最後に てんみんから気に入った絵を載せたいと思います。悠理さんの絵です。勝手に使ってすみません。

→ 5612 — 187 <

「やれ、ハリウッドの女優二坂美琴

現在、わたし三坂美琴は電車の中にいる。

実は、学園都市の外にある「まほら祭」というのにて当麻と一緒に行くことになったのよね。

「・・・で・・・」

私はこめかみに人差し指を抑えながら、

「何でこいつらがいるのよつ！」

「だつてだつて、その祭りにはおいしい食べ物がいっぱいって言つんだよ。行かないわけないかも」

「いや～、外の祭りって俺も初めてなんだにや～。楽しみ楽しみ」

「いやー、実言うと俺も初めてなんや。絶対楽しいと思うで～」

「女教皇様！^{ブリエステル}、その露出しきつたジーンズとヘンの上で絞つたTシャツは何なんですか！！」

「いや、これは左右非対称を作ることで魔術的な意味を・・・って五和！ あなたはこの理由を知つているはずでしょう！」

「お姉様あ、わたくしをおいて一人外の祭りに行く何で！ ゼひともわたくしもご一緒しますわ」

「建宮斎字さんつ、とうとうあの大精靈チラメイドと墮天使エロメイドの熱き戦いが見られるのですね」

「そういうわけなのよ。だがつつつ、まほら祭にはメイド服だけではなくコスプレもあるらしいのよつひとつーー！」

「おお～～」

青い髪のピアスをした自称当麻のクラスメイトから聞いた話によると。

あのバカ野郎は、私を誘つた後に土御門とか言う金髪サングラス野郎にも誘おうとしていたらしい。そんでもってその話を口いつが横から聞いていたらしい。そもそも、金髪サングラスが仕事仲間にそ手を伝えたらしい。そんでもってその同僚で、当麻と似たよ

うな髪形をした怪しい人が仕事場で言いまくつたらしき。

それが今の結果らしい。

あー、もういろいろ考へてるといやなこと思い出した。

「そこのあんた！ 確か前にそのデカい胸にサッカーボールが当たつて氣絶した当麻を突っ込ませていたわよねー！」

「えつ、いや、その・・・」

「ああ、あの『フリー キック大作戦』のときのことな

「ん~？ 僕そんなことしたがあああああ。痛い痛い痛い痛いいたーー。インデックスさん、なぜそんな根拠もないことで噛みついてくれるのですかーー！」

「そういえば前におつきにお風呂入ったときに短髪が行っていたんだよ。そのことを噛むの忘れていただけなんだよ」
・・・・・はあ。

「そんで当麻。あんたの言ひてるまほら祭つて・・・・・、流石に出血量が半端なくなつてきてるから頭噛みつくのやめたうじつなのよ」
当麻が必死に頭にかみついた銀髪スターを引きはがそうとしながら、そうだそうだ、なんて言つている。

「いまの私のすることは、とつまの頭を噛み砕くことなんだよ」
タスクテ、タスクテ、と当麻の口が言つているのを無視して私は話を続ける。

「・・・えつと、で、そのままら祭つて言つのはゞいつこのものなの？」

「ま、簡単に言つたら文化祭なんだんや~」

答えたのは当麻ではなくその右隣に座つていてる金髪サングラスだった。

「文化祭つて言つと一端覧祭みたいな」

「にやー、ま、そんなもんなんだにやー」

「なあーんだ、それだったら世界一の文化祭、一端覧祭を体験した

からすぐ飽きちゃうかも」

「にやー、そつとみいえないみたいだぜー」

今度答えたのは血まみれになつた当麻だつたものの左隣にすわっている青髪ピアスだつた。

「それ、どういひつゝじよ」

「おれもちよつと調べたんだぜい。あるとビリウム一端覽祭は世界とも言えないといふことだにや」

「そんなわけないぢやない。だいたい学園都市の技術は外よりも20～30年進んでいるのよそれなのに」

「金だせい」

「金？」

「や、^{オレ}学園都市らの場合は都市内での学校のPRを前提に開かれているわけなんだにや。そのため知つてゐる通り外の人たちが入つてくることはないんだぜい。そして、学校にも積極的や消極的もあるから、そりやお前らみたいな常盤台だつたら積極的だらうけども、中には外のと変わらないところもあるんだぜい」

「単に学校から支給されているお金の量が少ないってわけでしょ、平均が少なくてすゞ」といふはず「こわよ」

「いやいや、まだまだだぜ」

「さつさと書つてくれ」

氣づいたら当麻だつたものが息を吹き返してゐた。

どうでもいいけど、電車のシートが血まみれになつてゐるんだけど誰が掃除するのかしら。

「ああ、アーヴィングさん、お元気ですか？」坂美琴（後輩）

なんだかあまりにも中途半端になつたが長くなつたので、ついで
中斷します。

・ ハロメイドとハメイドに飽きたら、ヨリ井でやるやうのやう・

「たつた1日で2億6千万とか言うバカじゃない金が動くとか」 b ヨ士御門元春

「さつさとじつてくれ」

そう言つたのは、私の目の前に座つてゐるシンシン頭のこと上条当麻だつた。

「まあそつせかすんじやないぜい」

ふう、と金髪サングラスの土御門一（・・・だつたけな？）が一呼吸おいて続ける。

「さつきも言つたように一端覧祭は学園都市内だけで行われるにやう、周りからいろいろな人が来ること前提で起こされる祭りとは格が違うんだぜい。話によると、そのまほら祭は100万200万円の賞金を懸けたクイズやらなんやらあるらしいし、その祭りは3日に分けてするらしいけども、そのうちのたつた1日だけで2億6千万円とか言うバカじやない金が動くとか。もちろん3日間かけて数千万稼い出利だりするサークルも存在するんだぜい」

「す、数千万・・・」

すうせんまん？ ケタ間違つてんじやないのソレ。サークルつて言つ限り大学生なんだろうけど3日で数千万はあり得ないでしょ！――

「テクノロジーについてもすごいいんだにやう。全部が全部そういうわけじやないんだが一部の機関スタンダロンでは学園都市をも上回る技術が開発されていたりするんだぜい。独立歩行型機械の機動力も半端ないし、そこに積んだ－AI（人工知能）何か典型的なんだにやう」

「そんなんうそ！ 学園都市の科学技術力は外の20～30年進んでるのよ！」

「でも事実なんだにやう」

金髪サングラスのことを聞いて私は愕然としてしまつた。

もはや、一端覧祭が世界一じやないことを認めざる負えない。つていうかそんなにお金が動くんだつたらもはや文化祭という枠から外れているんじやないかしさ。

「まあよかつたんじやん？期待はずれみたいなことにならうで
かくて。なつ、ビリビリ」

まあそう言わればその通りなんだけど・・・

いや、これはむしろチャンスかもしない！

そんだけにぎわった祭りならどうぞくさにまぎれてこのフザケた集
団からのがれて当麻と二人きりになれるかもしないつつ――！――

一端覧祭の時も結局何もできなかつたし、なんとしても・・・・・・

・・・！――！

午前9時頃、電車のアナウンスが聞こえてきた。

『まもなく、麻帆良学園都市大正門前、麻帆良学園都市大正門前。
右側の扉が開きますので』注意ください。』

「つちよ、降りるわよ。」

「ええ、ああ、うん」

「とうまとうま、待つて」

「うつしやああ、いくせい」

「ウチも頑張つてエンジョイしたる！――」

「女教皇様、私は仕掛けます。あの少年に、チラメイドがなくて
も衣装は何かして入手します！――」

「えつつ、なつつ、そつ、あんなのはもう着たくない。いい
いいいや、もう私もそう言つてはいる余裕はありません。わたしも
よりの方に近づくためにつつ」

「いよいよ、いよいよあの勝負がアツッ」

「おおおおお落ち着け、牛深あ！――こは抑えるんだ。」

「お姉様ああ、ぜひぜひぜひぜひい私と一緒にこの祭りを回りまし
ょう――！」

「アンタら全員私についてくるなあ――そしてセレのシンシン頭、

あんたはこっちへくるう

やつてやるわ。一端覧祭の時のーの舞はしないつ。そしてここにつ

アリの構造を理解する。それをもとに、アリの行動を説明する。

「たつた1日で2億6千万とか言うバカじゃない金が動くとか」 b ヨ士御門元素

次回からいよいよ本格的にまほら祭へ突入します。初めての外での祭り。けども、上条たちにはすまないけども、感覚としては一端観察か大覇星祭とほぼ変わらないような気がします。

あとネタばれですが、「ネギま！」を読んだ方は知っているでしょうが、土御門の言った化学側学園都市よりも一部魔法側学園都市の方がテクノロジーが進んでいる理由が、「超 鈴音かやお りんしん」という100年以上後の未来人がいるからです。そりや、100年後技術と30年後技術だったらどちらが上かすぐにわかりますよね。・・・

「わー、わー、すー」と。つてミサカはミサカは初めてくる外の祭りでめちゃくちゃはしゃいでみる。そして、ここつて、一般企業も出てきてるんだー、とこの規模の大きさに驚愕もしてみる

「ふむ、ふむ、ふむ、残念じゃが、一船企業は、一も出と

「サカはミサカは指をさしながら見たことのない物体に対して情報をネットワークで参照してみる……」

「あれは全部うちの生徒が作ったものじやよ」「うそー、のうとつてみたいのうとつてみたい、とちよつと恥ずか

「うーん、身長が足りなくてちょっと無理かの〜」
「いいのを抑えつつすごいボケをかましてみる」

「いえーいちよつとぐらいたつ込めよー、とミサカはミサカは軽く腕を振り回す、そして身長ぐらい気にするなあーと言わんばかりの

「……しゃーないのー、じやあ「れを食べなさい」

な～おいしそう、という本音を隠しつつ「サカは」や「カはよだれを

「ちがうちがう、これを食べるとな・・・なんと体が大きくなるん
じゃよ」

「つそだー、はつ、もしや『たくさん物を食べると早く大きくなるよ』とか言つオチだなつ、とミサカはミサカは早くその飴玉ちょーだーい、といつ本音を必死に隠す」「

「まあまあ、だまされたと思って・・・」

「だまされたくないつ、つてミサカはミサカは
できないつつつ！…！」

もう我慢

ぱくつ（学園長の手にあつた餠玉を手）とかぶつつく音）

ギャー————（弔いとかぶりつかれた学園長の叫び声）

ボンッ（ラストオーダー打ち止めが謎の煙で包まれる音）

「いた、いた、痛たたたつたたたた・・・・おおーー見事に大きく
なつとるぞ」

「げほ、げほ、つとミサカはミサカはわざと咳をしつつ煙を手で払
う。・・・あれー？何か目線が高くなつたよつた氣がするつとミサ
カはミサカは周りを見まわしてみる」

「年は娘のこのかぐらいかのー、中₂か中₃かぐらいかな
・・・・・ほ、本当に大きくなつてるううううううう———」

「お、おこどこへ行くんじやー、ー、まあいつかの」

「ギャー———」　ｂｙ近衛　近右衛門（後書き）

チョット間が長くなりました。

更新しようと思いつつできなくてモヒ悲しそります。

ちなみに、あの謎の飴玉は、「年齢詐称薬」というものでネギま！で登場しているものです、プラスマイナス10さいから5さいまでの調節が効くとこりつです。最も、外見だけで厳密には幻術という設定らしいですが・・・幻術超えてね？

「前女子」「一セー」を裏道に連れ込んでなかつたかにや〜?」

by
土御門元春

「で・・・・・アス。どうして俺がやるのか?」**一せき**

土御門は若干ニヤケながら隣にいる人に話しかける。

「もわらんたー」の麻帆良祭? ナスプレーンテストを見るためや

11

一
卦
外
一
一
一

「人は、まとある」コンテスト会場にやってきてる。このコンテストはアニメに登場するキャラクターに変装してどこまで可愛くなるかというものである。

一 やつは、俺いもの地味子がサイドだにせー

初期アリギニアのバカラッケセロ

一苗二苗！ つーかバカアラッケじやな

法少女・ビブリオン』の方がいいぜい』

ピアスが何かに気づく。
どんどんマニアックな方向へと進んでいく人。そこでふと青髪

「ん？ あれは…」

「どうした?

「あ――――――！ネギ君や――！」

「おい、ちょっと待てい！」

「おー、ネギくん

土御門を無視して声を出す青髪ピアスの声でそちらを見るネギと

その近くにいる御一行。

「あつ、青髪さん。お久しぶりです」

「ネギくふん、この人だあれ?」

「わいは、青髪ピアスのこと、青髪ピアスや」

「どうも青髪ちゃん（ピーシャン）」

「……近寄るんじゃない、佐々木まさ絵。髪の毛は染めてるし、

ピアスもしている。明らかに不良だ。

「ち、ちゅうと、そんなこと言つちゃダメですよ千雨さん」

「せやでー、わざそんないとせえへんでー」

「ピアスー、前女子コーデーを裏道に連れ込んでなかつたかにやー

?」

「ちよ、なんでこそこな時にひまつぶつぶー。」

「「「うわあ・・・・・・」」

その場にいる全員が思いつきつ引く。急激なイメージダウンにしょんぼりする青髪ピアス。さすがにやつすきたと思つたか千雨が謝りだす。

「あー、すみません。ちょっと言つて過ぎました」

「ちよ、とむやうやー。今のでうちのハートどんだけぼほひひひされたと」「そういえばネギ先生が年上をあだ名で呼ぶつて珍しいですね」話をとぎらすな！ そしてスルーすんな！

「ん？ あだ名じやないですよ」「いらネギ君もスルーすんな……」

「ええっ、青髪ピアスつていつのが本名ー？」

「も・・いー、つーか土御門ー。お前はつむの名前しつじるやー。」

「知らなかつたにやー」

「オイッ！ー！」

「青髪さん、最初会つた時つてこれが本名つて言つてたじやないですか！」

「あーあれウソ」

「えつ！・・・・・・」

「じゃあほんとの名前教えてくださいよ」

「んー、せやなー・・・」

あごに人差し指を載せて上を向いてしばし騙り込む。

「ひみつうううーーー」

「前女子ourkeを裏道に連れ込んでなかつたかにや～？」 b y +御門元春

「んにちは、やりたいことがたくさんありますさて何一つ出来ない杉田玄白です。気付いたらこんな時間になっちゃいました。これからも頑張つて連載したいと思いますのでよろしくお願ひします。

青髪ピアスの本名つて何だらうつ・・・

「女装しなくちゃならないんだー

上条
y
b

上条当麻は極めて不幸だ。

普段は頭上のスクリンプレーだけがピンポイントで誤作動を起こしたり、大量の缶ジュークを持った状態でボールを踏んでこけたり。挙げ句の果てには何度も死にそうになった。

しかし、今の当麻にはそれこそ幸福の内の一たたきだのではないかと思っていた。

その経験が今役に立っている、なんてわけでもなく、考えてみればパンツ見れたり、（手の感覚はなかつたが）女性の胸触れたりい経験してんじゃん。と思つてゐるわけではない。もつと単純な話だつた。人生最大の不幸を体験してゐるだけ。

初めてこの不幸の体質を呪つた。

初めて不幸の元凶であるこの右手を切り離したくなつた。

そして始めて、

「何で俺が……………」

「御坂美琴」という人物を、

「女装しなくちゃならないんだ」

呪つた。

30分ほど前の話

解散と同時に御坂美琴は上条当麻の腕を掴むなり、元々足が速いことに足して体内の生体電流を操作して秒速52mという恐ろしいまでの速度で走ったのだ。もちろん、当麻はそのまま引きずられてあちこちボコボコなわけだ。

「いて、で行く當てあるのかと思つたら、ねーのかよ!」

「仕方ないでしょ、こんなにたくさんあるんだから!」

御坂はまほら祭のパンフをじつとかれこれ20分ほど見ていた。実際にここにあるアトラクションはとてもなく多い。あまりの多さに待ち時間がどにも20分程度で、3日間で主要アトラクションを回るのでさえ無理だと言われている。

「・・・あーーーもひーそんなに迷つんだつたらあれいこ、あれー!」

上条はテキトーに自分の後ろにあつた店を指す。

「・・・貸衣装屋?」

「と、取りあえずなんか服変えてそれから考えればいいじゃん」

「・・・えーーー」

「つべこべ言うな。人を長い時間待たせやがつて」

上条は半分無理矢理引っ張つて行く。

御坂は上条に手を握られてドキドキしながら引っ張られて行く。

服の種類は豊富だった。サイズ問わずロボットなどの着ぐるみ、ちょっとアブナイ水着、童話やアニメキャラのコスプレ、中にはパジャマみたいなのもあった。

御坂は中に入つてから何か浮かんだらしく、ねえねえと声を掛けれる。

「なんだ?」

「女装しないからならないんだ――――――――――――――――――

by 上条(後)

なんだかテニスにはまっている杉田玄白です。
なんだかどんどん投稿間隔が広がって言いつぶつな・・・
こんな話に付き合ってくれてありがとう♪それこそか。

次回はこの続きをします。

「なつ、なに！？」 by 周りの一般客

ପ୍ରକାଶକ

「おお、御坂さん。」
と、御坂は、紙袋を渡す。

「おれかドキーハジヤ無ニドシマハ」

「そんなワケないだろ、さつさと着替えにいくぞ」

「この更衣室は大きな部屋に小さなボックスがたくさん並んで
いるというだけのものだつた。

やあアンタそこね、私ココに入るから」

当麻はへーへー、と言いつつそこに入つて行く。

中はチョットとした鏡と機械じみた箱がある。その上には「着替

お送りいたします」と書かれていた。

「ねえー、私達のホテルってどこだつたかしらー？」

ちなみに、当麻たちがとまるホテルは経費削減ということもあって、コレでもかつていうぐらい広い部屋を一つ借りただけだ。そんな部屋がある事に当時当林は驚きまくつていたが。

ポケットの宿泊メモを見ながらそう答える。

わかつたわ、という声と共に隣からピッピッピ、と機械を操作する音が聞こえてくる。当麻もパンツ一枚になつてからホテルを指定してその機械に服を放り込む。

そして、紙袋の中から御坂美琴が選んだ服を引っ張り出す。

機械のタッチパネルに表示されている選択肢は3つ、1つは大きくあります。そのタッチパネルに表示されている選択肢は3つ、1つは大きくあります。もう2つはタッチパネルの隅にある小さな「English」と「メンテナンス」だ。

当麻は服をさらにホテルへ送るわけではない。ここに選択するは「メンテナンス」だ。当麻はそれを押す。するとパスワード入力画面が出てきた。関係者以外がいじるのを防ぐためのものだろう。当麻はこの機械を蹴つた。だが痛みが自分の足にむなしく返つてくるだけ。

すう、と大きく息を吸い込み、

貸衣装屋から出てきた時は、一人の顔は対象的だつた。美琴はとても晴れ晴れしていて、当麻は顔が死んでいた。

祭を楽しんでいる他の人々の目にはこう映っていた。

可愛い水着姿の女の子と変態赤ずきんが並んで歩いている。と、

「嗚呼アア亞あアア亞阿ア？アアアアアアアアアアアアーーー！」 by_一方通行（前書き）

必ずお読みください

今回の小説にはいちばん最後に挿絵が入っています。
キャラクター崩壊の可能性があるため
もしくは、心臓の弱い、体調がすぐれない人などは挿絵を〇FFに
してからお読みください。

くそつ、アン野郎ドコ行きやがった」

いま一方通行はとあるカフェの屋上にいる。連れ去られた打ち止めを探していたのだ。相手は魔術サイドの人間。

(アイツは一体ドコだ。学園都市には外へ出たような履歴は残つてなかつた。つてコトはあのセキュリティーに全く引っかからず、おかげ衛星からの搜索にも見つからなくなる安定シタ持つてゐると

—方通行は新しい能力スイッチを触りながら考へ入る。 アクセラレーター

（コイツは出来るだけ使いたくなエ。バッテリーの残量も気になる
しなア）

顔を手で押さえて頭痛を抑える。そしてあつくつとしたを見下ろす。

「おーい、ジジ、ジジ、マサカは、マサカは、何してませんよ？」

声は聞こえる。だが姿を確認できない。
いや、コツチ向いて手を振っている人物は確認できる。

だがあいつは・・・

「あれー、もしかしてシカトしてるー? つてミサカはミサカはア
クセラーテ方通行の視界と思考をミサカネットワークを通して覗いて「ナニ覗
こうとしてヤがる」どわあー! つてミサカはミサカは驚きを露わにす
る」

「テメエ、本物の打ち止めか？」
アクリラレータ
ラストオーダー

一方通行は打ち止めをよく観察してみた。

まず胸が大きい。いや、特筆すべき点はそこではないが、とりあえず大きい。

「なんか胸ばっかり見てない?つてミサ」「氣のせいだ」・・・・・

次に身長。確かに118cmだった。だが田の前にいるミサカは150cm程、150cmは絶対に超えてる。

「もしかしてミサカのナイスバディ」ううと「うるせーだまレ」・・

アワセラヒタ

一方通行は、はあ、とため息ひとつつき打ち止めに尋ねる。
アグエストオーラー

「どうあえがだ。テメエナンでそんナ服きてこい」

「そこの貸衣装屋さんで借りたのだからミサカは宣戦布
みる。あつ、一方通行も着てみ「断る」……だつたらもつと恥ず
かしい目にあわ「断る」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
——こおーなつたら意地でもしてやる——ミサカはミサカは宣戦布
告をしてみたり！」

「ハッ、ヤレむもんならやつて下れ!」

一方通行の思考が一瞬止まつた。
アクセラレーター

「テめエ 何しやがつたツツ・・・」

「ふふふ、チハの思考演算は誰がやっていると思つて居るのかなつ

۱۸۷

「一方通行」はその一言で全ての予測がついた。

実際に、「一方通行」の思考演算を担当しているのはミサカネットワークである。その道順を細かく言えば、手を挙げるという例を使って表すと

- 1、^{アクセラレーター}「一方通行」がチョーカーを通してどうやって「手を挙げるか」^{ミサカネットワーク}に教えてもらえるように申請
- 2、^{ラストオーダー}「打ち止め」がそれを許可し、「どうやって手を挙げるか」の情報を^{ミサカネットワーク}に流して御坂妹たちに演算命令を出す
- 3、「肩の筋肉を縮める」という演算結果を御坂妹達が出す

4、宇宙衛星からチョーカーを通して「肩の筋肉を縮めろ」と命令を下す

5、肩の筋肉が縮まり腕が上がる

つまり、2、の段階で命令内容を書き換えれば「一方通行」を自由に動かす事ができるという事だ。さつきの「一方通行」の打ち止めに対する敬語はそういういくつで行われた。

一気に青ざめる「一方通行」。

「ふふふ、これでわかつたかね（タツタツタ）逃げようとしても無駄だよ。つてミサカはミサカはちょー上から田線で言つてみる。

突然「一方通行」の足の動きが止まる。

ジヨーダンじゃねエ。

「一方通行」は近くを歩いている一般人客に（彼にとつては珍しく）助けを求める。

「おい、そこ！」

「は、ハイ。なんですか」

「た、頼むからオレを脱がせろ」たすけろ

「……………いまなんと？」

「オレのパンツ一も残さず脱がせて下さい（やはくたすけろー）」

（泣）

「し、失礼します」

「さあーて、どんな服させよおつかなー、つてミサカはミサカはイ
メージを具体的にしてみる」

> .i 30308 - 3890 <

「嗚呼アア亞あアア亞阿ア？アアアアアアアアアアアアアアアア！
！…………！」

「のまま死んでも良い、いや、早く死にたいと思つたアクセラレーター一方通行

だつた。

サバイバルゲームにはまりだした杉田玄白です。

いやー台風すごいですねー。私にとつてはうれしい限りです。
なぜかつて?

雨風がひどい中を大声出しながら走り回つたら気持ちいいじゃないですか！！！

ご近所さん、スマセン

ビーデモレーティングは置いといて

今回初めて自分で書いた絵を掲載してみました。いかがでしょう。
最初の注意書きで呼んでいない方はそのままで結構です。

いや、ヘッタくそですね。

ՀԱՅԱՍՏԱՆԻ

胸のふくらみは急遽入れました。

いやー男の私としてみればびっくりしました。何

うで感じです

忙しくなくてよゆーがあればまた書きたいと思います。
しないでください。とりあえず、許可取つてるので。

では拙文に感謝の言葉を送りたいと思います。

kyo-heappokさん、わざわざメールを送つていただきありがとうございました。

hiradaiさん、俺頑張ってるよ。いつも応援・・・さて

ウチのお母さん、こんな汚い絵を保存して「メモ」。すぐ消すから。

では次回予告です。

結局上条当麻との行動を逃してしまった五和一向。

なんだかんだで楽しんでいるが、ふと一枚のチラシに目が付く。

「まほら格闘大会」

賞金田当てに参加してみるが・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4366p/>

科学学園都市住民が魔法学園都市の祭りへ行く

2011年10月5日07時24分発行